

変なもの [その2] ー秋の虫こぶ集合ー

1. ヌルデミミフシ

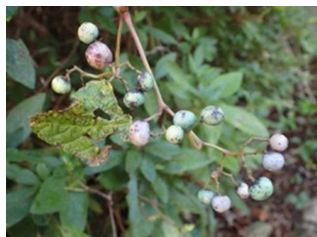
ウルシ科のヌルデの葉にできる虫こぶですが、大型で特異な形からよく目につきます。昔はタンニンの原料として採取され、乾燥したものを漢方では五倍子(ゴバイシまたはフシ)と呼びます。70%近く含まれるタンニンが、植食者の摂食阻害物質であることからヌルデの葉を食べるガ類の幼虫から虫こぶを守っているという研究もあります。タンニンはインクや染料、皮なめしにも用いられるため林産資源となった唯一の虫こぶです。江戸時代のお歯黒には、鉄と反応させて用いられました。



資源となったことで研究が進み、次のようなことがわかっています。春にヌルデシロアブラムシが葉に産卵したものが、虫こぶとして夏に膨れ始め、晩秋には破れて内部から多数の有翅アブラムシが飛び出してチョウチンゴケで次代が越冬し、翌春にまた次世代がヌルデに帰るのです。チョウチンゴケは相撲場上の谷の石上など水のかかる場所に生育しています。

ヌルデミミフシができるのは葉の表皮ですから、秋には紅葉し、落葉とともに落ちてしまいます。

2. ノブドウミフクレフシ

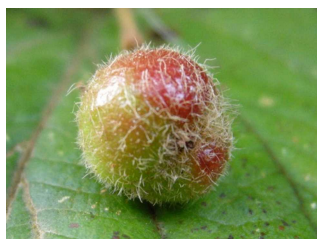


エビヅルは、ブドウそっくりの小型の房がつき、味も同じです。しかし、打吹山では雌株をみていません。その点、ノブドウはどの株もたくさんの果実をつけ、ブドウとはグループが違うことがわかります。

たくさんの実の中に大きいものがあります。これがノブドウミフクレフシと呼ばれ、ブドウミタマバエが寄生して生じた虫こぶです。割ってみると中に1匹の幼虫がいます。ノブドウの実が熟してくると、いろいろな色をしたものが混じり大きさもいろいろです。寄生されていない実は白色で柔らかいのですが、硬いものは寄生されています。他にもノブドウの実や茎に虫こぶを作る昆虫がいて、ブドウの仲間は人気です。実の様々な色についてもよくわかっていないようです。

3. ガマズミミケフシ

9月末、紅葉よりも早くガマズミの実の色付きます。打吹山にある近縁種のミヤマガマズミとコバノガマズミよりも早い時期に赤くなるためよく目立ちます。ガマズミは実が酸っぱくて食べられることから酸味(スミ)と名付けられたのですが、食べようと近づくと、大きくて色付きせず毛がいっぱいの変な実が混じっています。房が全部このような実になっている部分もあります。



正体は、ガマズミミケフシと呼ばれる虫こぶで、寄生者はガマズミミケフシタマバエの幼虫です。若い果実を刺激物質で異常成長させるとき、表面の毛も成長させてしまったのでしょう。食べてみる気は起きません。幼虫は落下した虫こぶの中で翌春まで過ごすことになるのです。